



ダブル
母娘 蜜くらべ

試し読み版

挿絵/asagiri
北條拓人
リアルドリーム文庫



ダブル母娘蜜くらべ

北條拓人
挿絵 / asagiri



Contents

目次

| | | |
|-----|-----------|-----|
| 序章 | 秘蜜生活のはじまり | 4 |
| 第一章 | 美熟未亡人の淫蜜 | 19 |
| 第二章 | 美人女子大生の蕩蜜 | 79 |
| 第三章 | 幼馴染美少女の恥蜜 | 131 |
| 第四章 | 艶美女の陶蜜 | 210 |
| 終章 | | 269 |

登場人物

Characters

田原 研介

(たはら けんすけ)

両親が海外赴任することとなり、一人暮らしすることになった高校生の少年。他人に対する素直さとやさしさは人一倍持っている。

御神 るり子

(みかみ るりこ)

研介の母の親友で、一人置いていく研介のことを託されている未亡人。柔和でおっとりした性格の美人で色気もたっぷり、フェロモン放出しっぱなしの熟女。

御神 優花

(みかみ ゆうか)

るり子の娘で、研介の家庭教師を買って出ている女子大生。明るくアクティブな性格で尚且つ、母親譲りの美巨乳で抜群のプロポーションを持つ。

木崎 香澄

(きざき かすみ)

研介の幼馴染であり、彼女でもある女子高生。誰もが目を見張るほどの美少女で、ぱっちりとした双眸には特有の引力がある。負けん気も人一倍強い。

木崎 恭子

(きざき きょうこ)

香澄の母でキャリアウーマンとして働くバツイチ熟女。すらりとしたしなやかな肢体に、男好きのする肉感的な身体だが、身持ちの堅い人妻の矜持も滲ませている。

第一章 美熟未亡人の淫蜜

の双眸。少しだけ受け口気味が愛らしい花びらのような唇。

頬高なところも和風美人の条件を満たし、すつきりとした顎の線も、いずれ劣らず美しい。

漆黒の髪は、いまだ天使の輪ができそうなほど艶やかで豊かに流れるロングヘア。仕事に出るときは、一本の三つ編みに纏め、肩から前に提げている。

研介の前では普段着の彼女が、いつだったかそのスーツ姿を見たことがある。

やわらかい雰囲気の彼女がプライベートな素顔から、ビジネスにシフトした時の凛としたその姿、ギャップ萌えのような感情が、研介の淡い恋心をより確かで激しいものへと変化させたのを覚えている。

いまの香澄の表情は、どちらかと言えばプライベートの時の恭子のそれに近い。

研介は、その美貌を追いながら息を荒らげて、香澄の唇を食った。

「ああん……今日の研介のキス……むふん、んんっ……すごく、情熱的で……香澄、うれしい……」

薄化粧の施された桜唇を一度離れてから、再びぶつけると、香澄はキスだけで陶然とした表情を浮かべた。

エロ本やその手のノウハウ本、インターネットなどで得た知識を懸命に思い出しながら舌を伸ばす。

研介は、香澄がすでに一通りの経験をしていることを承知している。

彼女がすでにパーズンを失っていることは、正直に香澄の口から訊いていた。

一学年上の先輩とつきあった時に、一度だけそういうことがあったようだ。実は、その彼氏に関しては、別れてからもストーカーカーマがいることがあり、その解決には研介が一肌脱いでいる。

思えば、香澄の研介を見る目が変わったのは、その時からかもしれない。

香澄の過去にこだわる気持ちは、研介にはない。けれど、彼女の方が、どこか負い目に思っている節があり、だから尚更、キスさえ許してもらえずにいたのだ。

しかし、いまの香澄は違う。自ら積極的に舌を絡みつけ、研介を求めてくれるのだ。
(ああ、恭子さんも、こんなふうに、僕を求めてくれないかなあ……)

若き日の恭子に口づけしている気分で、その娘を抱く自分に、青臭い自己嫌悪が苦く口の中に拡がる。それを打ち消してくれるのも、美少女の甘い舌だった。

「香澄……っ」

か細い理性を懸命に手繰り、彼女の名を間違えずに呼んだ。

すると、香澄の華奢な肉体がびくびくと震え、悦びを露わにした。まだ硬いが、十分以上に存在感を備えた乳房が、その弾力を味わわせるように押し付けられている。美少女の体温が腕の中で、確実に上昇する。その高まりが研介にも伝染し、たまた

ない興奮が背筋をゾクゾクさせる。

恭子の面影が霧散して、いまは香澄の存在だけが唯一無二のモノと思えてくる。込み上げる彼女への思い。

「好きだっ。香澄、好きだよっ！」

口にすると、感情が一気に膨れ上がって、下半身へと収斂されていく。分身が激しく疼き、勃起した。

「研介の……。香澄のお腹にあたっている……」

そのか細い声。睫毛を震わせ、恥じらう美少女。

「すごいよ……。凄く、大きくって、怖いくらい……」

いつも大人びて見える彼女が、等身大の可愛らしい香澄に戻っている。

初体験は済ませていても、やはり彼女は手弱女に過ぎない。17歳の女子高生には、極限にまで勃起上がった研介の肉勃起は、ある種の凶器に映るらしい。

もしかすると、レイプまがいに無理やりロストバージンさせられた過去も、影を落としているのかもしれない。

「怖い？ これがかい？ ふーん。香澄でも怖いものがあるんだあ」

いつもの調子で憎まれ口を叩きながらも、朱唇をちゅちゅつと掠め取る。

怖くなどないのだと、教えてやりたかったのだ。

学校帰りの香澄は、ブレザーを脱ぎ、白いシャツ一枚になっている。

コットン生地 of シャツ一枚を脱がせてしまえば、あとは下着姿になることを研介は強く意識している。

やるせなくいきり勃つ分身に急かされ、研介はもう一度香澄を強く抱き締める。

「あんっ……」

愛らしい悲鳴が、小鼻から漏れた。強すぎたかと思いつつも、その手を緩めることはできない。

それどころか彼女の腕も、研介の背中に伸びてきて、もつと強くと言わんばかりに抱きしめてきて、頬まで擦り寄せてくる。

「この大きくなったの、どうするの？」

「収まりがつかないね。香澄の身体からしているいい匂いが余計に、収まりつかなくさせているんだ」

「したいなら、してもいいよ……」

香澄は初体験の相手として申し分のない相手だ。年上のるり子や優花、恭子にやさしく教えてもらうことを夢見ていたが、彼女たちの方が研介を相手になどしてくれないだろう。

それを判っているだけに、思春期の少年は節操なく香澄に発情してしまうのだ。

それもそのはず、香澄の発育のよさは、とうに大人のそれに近づいている。

ゴムまりのような乳房などは、容易く研介を虜にしてしまうことだろう。

互いに抱き合うことで、体温が上がり額に薄ら汗まで滲ませている。香澄の白い肌などはしつとりと湿り気を帯びており、フェロモン混じりの芳香を無自覚に発露させているのだ。

(香澄と……。このやわらかいカラダとやれる！)

心臓が激しく脈打ち、体温がさらに上がるのを感じる。まるで熱に浮かされるかの如く研介は、牡の本能を激しく震わせた。

「したい！ 香澄としたい！」

ムードの欠片もない求愛にも、香澄は目元まで赤くさせて頷いてくれた。

「じゃあ、香澄の裸を見せてもらってもいい？ これを脱がせても……」

白いシャツを引つ張り、研介は同意を求めた。

香澄は、その場にすくとんと腰を降ろし、カーペットの上で女の子座りに膝を崩し、下から研介を見上げながらこくりと頭を縦に振った。

研介も香澄を追いかけられるようにカーペットに正座して、指先を白いシャツのボタンに運んだ。

緊張に指先が震え、なかなか上手く外せない。それでも香澄は、恥ずかしそうに目

を伏せたままじつと動かずに、なすがままでいてくれる。

上から一つ、二つと外れると、ピンクのブラジャーが現れた。

細身であるにもかかわらず、そこだけがずいと前に迫り出すような印象。ブラのカップがびたりと覆っているにもかかわらず、微かに香澄が身じろぎするたび双丘が艶やかに揺れる。

芳醇な谷間が強烈にアピールして、研介の視線をムリヤリにねじ伏せている。光沢のある淡いピンクの布地とその表面にちりばめられた細やかな刺繍が美しい白い双丘を華やかに装飾している印象だ。

「ね、ねえ、研介、ずっと胸ばかり見ていないで……」

いつの間にお留守になっていたボタン外しを、恥ずかしそうな表情で香澄が促した。「あっ、そ、そうだね……」

慌てて、次のボタンに取り掛かる研介。けれど、先ほどよりも上手く外せるようになつたのは、やわらかそうなフォルムに気を取られ緊張がほぐれたせいだ。

ごくりと生唾を呑んでから白いシャツの前合わせを、観音開きに泣き別れさせた。「研介って、巨乳好きなのね……。男の人ってみんなそう。外に出るとうざい視線をいつも胸に感じるもの」

ただでさえ人目を惹く美少女が、これだけの乳房をしているのだから、男たちの視

線がそこに張り付くのも納得がいく。快活な彼女のアクションに連れ、悩ましく上下に弾む胸元は、殺人的ですらあるのだ。

男たちのそんな不躰な視線を嫌い、ひとまわり小さめなブラサイズに乳房を押し込んでいるから、余計に深い谷間ができていて、今にもブラカップから乳肉がはみ出しそう。

「巨乳好きは認めるけど、でも、香澄のおっぱいを見ていたいのは大きいからってばかりじゃないよ。その……あんまり綺麗だから、つい……」

昨今は巨乳流行なのか、みんな発育がよいのか、巨乳を誇るグラビアアイドルは多い。けれど、そんなアイドルたちを探しても、香澄ほど均整のとれたバストの持ち主は見つからない。

研介は、素直な本音をそのまま口にした。物心ついたところからの幼馴染でもある香澄に、お世辞など通用するものでもないのだ。

そう伝えた次の瞬間、素晴らしい風合いに満ちたやわらかな物体が研介の顔を覆った。

「ふえっ、か、香澄いつ？」

怒涛の如く、美少女の甘い香りが鼻腔いっぱいに拡がる。

膝立ちした香澄が、その魅惑の双丘を研介の顔に押し付けてきたのだ。

抱きしめられていると理解するまでに、数秒を要した。

「おっぱいばかりジロジロ見られるのは気持ち悪いけど……。綺麗だっておっぱいを褒められると、やっぱりうれしい……」

甘いしあわせをまぶした美少女の微笑が、上の方から研介に注がれている。

ほんの何気ない一言。飾らない当たり前の感想を吐露しただけで、香澄がこんなに悦んでくれるなど思いも寄らなかつた。

（うわあああつ。香澄が可愛い……っ！）

込み上げる愛しさに研介も、その細い背筋に腕を回した。

（ああ、これって……）

シャツの上からでもそれと判る、一際硬い繊維と金具。豊かなバストをさりげなく支えながら保護するブラジャーのホックの存在。

細身の身体に手を回したままシャツの裾を手繰り寄せ、その内側に手指を滑らせた。美少女の肩が一瞬だけ震え、朱唇から小さな吐息が洩れる。

研介が次に何をしたいかに気づいたららしい香澄は、はにかむような微笑を浮かべている。

ブラを外されることを承知で、大人しくしてくれるのだ。

大きな瞳には、慈愛と恥じらい、さらには興奮の色までが複雑に入り混じっている。

やわらかで温かな絹肌の質感や瑞々しさを愉しみつつ、ブラジャーのホックを双方の指で摘み取る。

けれど、未経験の研介には、それを外すのも一苦労で、なかなか思うように任せない。どうしても上手くいかず、焦りはじめたところに香澄の助け舟が入った。

両腕を背中に回し、器用に研介の指先を取って、こう外すのだと導くように、きゅつと内側にホックを寄せるのだ。

カチツと微かに金属性の擦過音が弾けたかと思うと、少女の背筋に伸びていたバックベルトが左右に離れた。

(つ、ついに香澄のおっぱいとご対面かあ……)

未だ薄い肩から羽織っている白いシャツを向こう側に落とし、さらにはブラのストラップを横滑りに移動させて、二の腕に軽くかける。

美少女の絹肌を覆う上質な布地がずれ、大きなふくらみの側面が少しずつ露出していく。

全てが露出するギリギリのところで、バストトップにハーフカップが引っ掛かる。その危うい様子が何とも淫靡であり、扇情的にも映る。

「ああ……」

相変わらず、じっとしていてくれるものの、裸にされるのはやはり恥ずかしいのか、

香澄が短い吐息を零した。

「い、いいのだよね？」

さすがに美少女の羞恥を察した研介は、急に気弱になって訊いてしまった。

「い、いいよ。香澄のおっぱい、見たいのではありませんか？」

逆に聞き返され、ぶんぶんと頷く研介に、香澄が強張った表情を緩ませた。

繊細な指先が胸元に運ばれたかと思うと、バストトップに引つかかるハーフカップ

ブラを白い谷間をなぞるようにゆつくりと外した。

「う……わあ……。こ、これが香澄の生おっぱい……。き、きれいだあ……！」

想像をはるかに超える美しさの双乳が、惜しげもなくその全容を晒したのだ。

細く華奢な女体に、そこだけが圧倒的なボリュームで盛り上がっている。

制服をパンパンに張り詰めさせていた正体がこれだ。

しかし、ただ大きいばかりではない。何とも言えぬ気品と儂さを感じさせてくれる。

それは抜けるような肌の白さと、歪みひとつないお椀状のフォルムの美しさが与える

印象なのだろう。さらには、驚くほど可憐な乳首の存在も手伝っている。小さな乳

輪は純ピンクに淡く染まり、白皙とのコントラストがとても鮮やかなのだ。

「か、香澄い……」

生身の裸といえ、先日の優花の裸身以外は知らない。それもこれほどまでに間近

にするのは、初めてのことだ。

ただでさえ昂る劣情が美麗なる扇情に晒されたのだから暴発するのも致し方ない。気が付くと研介は、矢も盾もたまらず香澄をその場に押し倒していた。

順序を踏まなければならぬことは、重々承知している。焦る分だけしくじりが多いことも。けれど、荒々しい衝動に制御が効かず、見境がなくなっている。彼女を押し倒した瞬間、まるやかな白い半球に手が触れたのもまづかった。

極上の絹肌の滑らかな触り心地に、さらなる興奮を煽られたのだ。

上質なプリンよりもさらに滑らかで、それでいて高反発力の秘められた乳房が、研介の手指性感を痺れさせる。

それも指先を埋めた途端、すぐに掌全体を使わずにいられない気持ちよさ。

指の力加減に応じて白いふくらみは自在に容を変え、緩めるとふると元の美しい半球に戻る愉しさ。胸を揉むだけで、これほどの多幸感が押し寄せるとは思ってもみなかった。

ずっと揉んでいた気持ちにさせられると共に、それだけではすぐに物足りなくなり、唇を這わしたくなっている。

「香澄っ！」

愛しさを込めてその名を呼ぶと、それと気づいた美少女が、細腕を首筋に巻き付け

て、そつと乳首に導いてくれるのだつた。

可愛らしいまでに純ピンクの蕾をはむつと唇に啣え、本能のままにレロレロと口腔に弄ぶと、びくんと香澄の背筋が慄いた。

「あ、んっ……」

零れた甘い吐息の艶めかしさ。研介とてアダルトビデオで、女優の喘ぎ声を耳にしている。けれど、生で聴くおんなの吐息は、とてつもなく興奮をそそるものなのだ。

「ああ、香澄っ、僕う、僕う……」

またしても研介は、経験のなさを露呈することになった。

乳房を愛撫するのもどこかしくなり、ただひたすら彼女と結ばれることばかりしか考えられなくなっているのだ。

「ごめん。香澄、僕、もうどうしようもないよ」

研介の切羽詰まった気持ちに黙って美少女は汲んでくれた。

「いいよ。研介、挿入したいのでしょうか？ 香澄もして欲しい……」

やさしく囁くと、香澄は寝そべったまま自らのスカートの中に手をくぐらせ、下腹部を覆う薄紅のショーツをゆつくりとずり下げていくのだ。

暫し、呆然とその様子を眺めていた研介もはたと気づき、大急ぎで自らのズボンとパンツを脱ぎ捨てた。

「ああん、すごく大きい。研介、こんなに大きかったの？」

大きな瞳が、しばしばと二、三度瞬く。これが自分の中に挿入ってくるのかと、怖
気ているようだ。

しつかりと皮の剥けた肉柱の威容は、女性の眼にはグロテスクに映るだろう。

研介自身は見慣れたものだが、その輪郭といい、血管の這いまわる禍々しい雰囲気
といい、凶悪な塊にしか思えないかもしれない。

まして、香澄はこの春高校三年生になったばかりの17歳の女の子なのだ。

一度だけの経験では、研介ほどの分身は知らないだろう。

「子供の頃、一緒にお風呂に入った時と全然違う……。こんなにごつごつしているな
んて……。ねえ、これ痛くないの？」

興奮と好奇心がまん丸くさせた瞳に宿っている。

相手が幼いころから知っている研介だけに遠慮がないのか、人差し指を伸ばして、
側面をツンツンと突いたりするのだ。

（香澄が僕のちんぽに触っている……。なんか仕草が可愛いなあ……）

清らかなお姫さまが、指先で悪戯をしているようで、研介の欲望が熱く滾った。

「すごい。研介のおちんちん、熱うーい……」

ついには、肉茎を握りしめ、ひんやりした白い指の感触を味わわせてくれる。

香澄としては、研介に奉仕する気持ちよりも、自らの好奇心を満たすための行為であつたようだが、それでも獣欲が激しく湧き立つのを否めない。

心地よい刺激に、たまらなくなり研介は、またしても香澄をその場に組み敷いた。どうしていいのか判然とせぬままに、それでも本能に導かれるまま体の位置を強引にずらし、自らの下腹部を彼女の股間へと運んだ。

「ごめんね。研介……。香澄、バージンじゃなくて……」

古風な香澄の価値観を研介は意外に思いながらも好もしく思った。

「香澄、好きだよ」

「か、香澄も、研介のこと……」

研介の動きに呼応して、美少女が太ももを開いてくれた。

「きてっ！」

サクランボの如く頬を赤く染め香澄が促してくれた。

（ついに初体験できるんだ……。香澄とセックスするんだッ！）

美少女の求めに、もうすでに研介は打ち漏らす寸前というほど肉傘を膨らませている。渦巻く興奮に身を任せ、腰を押し付けるようにして、一刻も早くと疼く勃起を挿入した。——つもりだった。

しかし、猛り狂う切っ先は肉溝をずるんとこそぎつけてニアミスするばかりで、望

む挿入が叶わない。

未経験であるが故に思いのほか難しく、パンパンに膨らんだ亀頭は楚々とした縦溝に擦れるばかり。

「いやああん、ちが、そこ違うよお……あん、研介えっ！」

少しでも研介の手助けをしてくれるつもりなのか、腰高の桃尻が軽く持ち上がり、香澄も切っ先を探る。

けれど、上手く息が合わず、研介の剛毛と彼女の繊毛がしよりしよりと擦れるだけで、想いを遂げることができない。

慌てて研介は、腰を引きもどし淫裂に垂直になるように角度を修正した。

（こ、今度こそ！）

勢い込んで押し進めはしたものの、またしても切っ先は、入り口粘膜を突きまわすばかりで、上手く縦渠に入ってくれない。

（えっ？ あ、あれ？……。こ、ここじゃない？ でも、あれっ？）

欲情にただでさえ気が急ぐ上に、香澄の手前、スマートにことを運びたい思いが、さらなる焦りを呼び、余計上手く嵌らない。失敗に失敗を重ね、ついには、どうすれば埋まるのか判らなくなつた。

「ど、どうすれば……」

初体験は済ませていても、香澄にも研介をやさしく導くほどの知恵も経験もない。

「ぐああつ、や、やばい。ちんぽが痺れてきた！」

まずいことに亀頭粘膜が会陰部と擦れあう心地よさに、あっけなく果てようとしていた。やるせないまでのもどかしさが、次々と背筋を駆け抜けるのだ。

「ああ、か、香澄、僕もう……！」

情けなくも泣き言を漏らす研介に、美少女が慈愛の込められた笑顔を向けてくる。

「いいよ。射精だしちゃっても……。ムリせずに、ね……」

穏やかな微笑は、巨根を迎え入れずに済みそうな安堵を含むものか。

仰向けのまま香澄がすべすべした手指を伸ばし、やわらかく亀頭部を包んでくれた。そのしあわせな感触にも刺激され、射精衝動が全身を貫いた。

「ああ、もうだめだ……。で、射精するっ！」

重々しく白濁を溜めこんだ玉袋をきゅんと絞ると、どつと精液が肉竿を遡った。

美少女の手指をしとどに穢した牡汁が、勢い余って肉花びらにまで飛沫を浴びせる。情けなく思いながらも、香澄の美貌と大きな乳房を眺めながらの射精は、最高に気持ちがいい。

恍惚の余り、弛緩した唇の端から涎が零れる始末だ。

「ごめん。香澄。でも、一度射精しちゃえば、今度は落ち着いてできると思う」

醜態を晒した恥ずかしさはあったが、このままでは終われない想いもある。

気まずい空気を今一度立て直そうと、頭を巡らせているところに、またしても邪魔が入った。

玄関で扉が開く音がしたのだ。

恐らくは、合鍵を持つる子が、掃除にでも来てくれたのだろう。

最悪のタイミングに、研介と香澄はなす術もなく凍りついた。

4.

「えっ、あ……。か、香澄ちゃん？」

慌てふためき乱れた服装のまま香澄が逃げるように出ていくのを、るり子が呆然と見送っている。

振り返った彼女は下半身丸裸の研介を見て、ようやく事態を悟ったらしい。

「ご、ごめんなさい。私、研介くん、まだ学校だと思っていたから……」

研介としては、まさかるり子に謝られるとは思っていなかった。

つい先日からとはいえ、るり子は研介の保護者も同然であると共に、香澄の伯母でもあるのだ。

未成年の二人が、不純な交友を持つことを叱るべき立場にあると言っている。

けれど、明らかにるり子は目撃した事態に動揺し、自分がどういう態度に出るべきかに困っているようだ。

「い、いえ。るり子さん。これは、その……」

対する研介も動揺を隠せない。

気まずい空気もさることながら、香澄とこのことをるり子に見られてしまったことが、どうにも気にやまれる。

それはなんとなく浮気現場を押えられたような、そんな心持ち。いつの間に、るり子のことをこれほどおんなどとして意識していたのかと我ながら驚いた。

(でも、いやだ。このままるり子さんに軽蔑されるのだけは……)

恐ろしい結末を思い浮かべ、心臓がきゅんと締め付けられる。

「あの、研介くん。お願いだから、パンツ履いてくれない？」

言われて、ようやく研介は自分の姿に気が付く始末。動揺のあまり、そんなことも失念していた。

慌てて下腹部を手で隠そうにも、あろうことかペニスは縮こまるどころか、大きく膨れ上がるばかりだった。

自分でもよくわからない生理現象に、ますます研介はパニックになった。

「あの。ごめんなさい。るり子さん。だから、僕のこと軽蔑しないでください。るり

子さんに嫌われたら、僕……」

なんだかひどく落ち込んだ。香澄やるり子の前で、無様な失態を重ねるあまり、情けなくて泣きそうだった。

「まあ、どうして……。私が研介くんを？ 大丈夫だから安心して……」

心配したるり子が、研介の傍らに来てしゃがみ込み、そっと肩に手を置いてくれる。「ね。研介くん……。そんなに落ち込まないで……。それとも何か香澄ちゃんとおつた？ 私でよければ訊いてあげるわよ。男の子の気持ちはよく判らないけど、女の子のことならきつと……」

やさしくされると、余計に泣きたくなる。それさえも男として情けないが、どうしようもない。

研介は促されるまま、るり子に香澄との出来事を打ち明けてしまった。

ようやくキスを許してくれたこと。いい雰囲気にはなるが、なかなか結ばれずにきたこと。そして、いざという時に、今度は上手くできなかつたことまで、包み隠さず赤裸々に口にした。

なぜそこまで話してしまうのか研介自身不思議だった。いつもの研介であれば、口を濁し、ごまかしていたであろう。けれど、今は、不安な心情を全て吐き出してしまいたい気持ちになっている。

るり子がとても聴き上手で、心内の全てを打ち明けずにいられないほど、相手の氣持ちに寄り添ってくれる女性であつたからだろう。

「すみません。こんな話、るり子さんは香澄の伯母にあたる人なのに……」

「そうね。本来なら私は、若いふたりを止めるべきなのかな……。けれど、愛する思いは止められないし……。それに、愛する人を失う哀しみは誰よりも知っているから」
それは、未亡人のるり子ならではの言葉だつた。

「後からもつと愛しておけばよかつたなんて後悔は、誰にもして欲しくないの……。研介くんにも、香澄ちゃんにも……。だから、若いふたりを非難したりしないわ」

慈愛の込められた眼差しが、とても温かい。

「だつたら、それは僕が、るり子さんを愛してもいいってことですか？」

「えっ？」

「僕、香澄のことが好きだけど、判らなくなっているのです。どうしても僕、香澄以上に、恭子さんやるり子さんに惹かれてしまう。今だつて、香澄とのことをるり子さんに見られて、こんなに動揺したのは、それがるり子さんだつたからで……」

またしても激情に襲われた。目の前のるり子を抱きしめてしまいたい。艶やかな唇を奪い、迫力たつぷりの双乳に顔を埋めてしまいたい。

けれど、そんなことをしたら今度こそるり子に愛想を尽かされる。

それにたとえ、実力行使してるりを組み敷いたところで、先ほどの香澄の時と同様に失敗してしまう不安もあった。

今度あんな失敗をしたら、男として二度と立ち上がれなくなるような気さえしている。その思いが研介を萎縮させた。

「研介くん……？」

気が付くと激情と葛藤する研介の顔のすぐそばに、るり子の美貌があった。

「もしも、もしもよ……。私のようなおばさんでよければ、研介くんに手ほどきをしてあげましょうか？」

一瞬、研介にはるり子が何を言いだしたのか判らなかつた。

「香澄ちゃんと上手くないのは、伯母の私にとつても哀しいことだし……。このままでは研介くんも自信喪失しちゃうでしょう？ もし、本当に私のことを研介くんが思ってくれるのなら、その思いに応えてみようかなって……」

驚いたことに、ごく自然に研介の太ももの上に、るり子の掌が置かれた。

思えば先日もこうされて、発情したのを覚えている。

るり子の行動の一つ一つが無防備なのは、天然であることに輪をかけてアメリカナイズされたものなのか。

るり子のおんな心など、研介にはさっぱりわからないが、未亡人の願ってもない申

し出に、自分がすっかり舞い上がっていることは判っている。その当然の帰結として、牡の反応を止められずにいた。

露出させたままの下腹部が、恥ずかしげも節操もなく、さらに大きく膨らんでいる。「研介くん、すごいっ！ こんなに大きいのか？ うふふ。でも、この反応は、私に期待しちゃっている証拠よね」

薄らと頬を赤らめ、研介の肉塊を魅入るるり子。心なしか彼女の方からフェロモンの熱風が押し寄せる気がした。

もしかすると、期待しているのは研介ばかりではないのかもしれない。その証拠に、大きな瞳がとろんと潤み妖しい輝きを含んでいた。

「いいわ。教えてあげる。その前に、もう一度だけ確認するけど、研介くん、最初が私で、後悔しないわね。私は君のお母さんよりも年上なのよ？」

「絶対にしません。僕、るり子さんと初体験できるなら死んでも構わないくらいです」「だめよ。死ぬなんて言わないで……。その一言は未亡人には禁句よ」

急に真顔になって諫めるるり子に、研介は慌てて首を振った。

「ごめんなさい。でも、それくらいうれいってことで……。だって、るり子さんは最高に綺麗で、若々しくって、それに……」

「それに？」

研介の数少ないボキャブラリーで大人を口説くには、正直であることが一番だ。ダイレクトすぎて誤解されかねない表現だが、思い切ってその言葉を口にした。

「エロい」

「エロい？ あら、それって褒め言葉なの？」

やはりるり子は大人だ。ぽってりとした唇に、やさしい微笑を浮かべながら鷹揚に聴いてくる。

「うん。だって、るり子さん、ものすごくセクシーで、おっぱいもお尻もこんなに色っぽくて……。ちよつと、手を太ももに置かれるくらいで、もうこんなになるくらい。エロ過ぎて、僕、もう……」

口にすると感情が昂り、その女体に震い付きたくて仕方がなくなる。なぜ、それを抑えられているのか、自分でも不思議なくらいだ。

「判ったわ。でも、ここでは、ちよつと……。研介くんの部屋に案内してくれる？」
るり子が部屋を見渡したのは、ここには研介の両親の生活の匂いが未だ色濃く残っているからだろう。何と言っても研介の母親は、るり子にとっても大切な友人であるだけに、ここで研介と交わるのはあまりに背德的で憚られたようだ。

カーテンレールが擦れる甲高い音が、これからはじまる官能劇の幕開けを告げる。春本番、四月の力強い陽光は、カーテンに遮断されても、部屋に十分な明るさをもたらしてくれる。

研介が体重をベッドの縁に預けると、ギシとスプリングが軋み、縁に腰を降ろしていたる子の子の軽い女体をわずかばかり上下させた。

白いシャツの上にゆつたりと羽織ったカーディガンを、彼女はするりと脱ぎ捨てる。下はと言えば、白いチノパンを腰高に履きこなしている。

飾らない装いながら若々しさと清楚さが、呆れるほど似合っている。

(ほ、本当に、るり子さんとやれる！)

年上の女性にやさしく導かれ初体験を済ませたい——。そんな研介の願いが、図らずも叶おうとしているのだ。

それもこれほどの美女から手ほどきを受けようとしている。

どうしてこうなったのか夢見心地でよく判らないが、その幸運を天に感謝した。

「それにしても、凄いのね研介くん……。ずっと勃たせっぱなし……。うふふ、若くて、元気っ」

照れ隠しなのか、気まずい空気を掻きまわすように、細い人差し指が膨らんだままの先端をつんと突いた。

「うおっ、おおっ！」

それほどの刺激ではなかったが、いきなりり子が触れてくるとは思ってもいなかった。それだけに、大げさな声が出てしまう。

「うふふ。敏感なのね……。こんな元氣なら、愛撫してしまうと昂り過ぎて果ててしまうかしら？」

言いながらも悪戯な指先が、今度は濃い陰毛の中で円を描く。爪を立てて皮膚を軽く引つ掻くようにして、微かな刺激が送り込まれた。

「あの、ぼ、僕、敏感すぎるのですかねえ……。だから、早打ちしてしまうのでは？ だとしたら、男として……」

心地よくはあるものもたげる不安に、研介は俯いて深い溜め息を吐いた。

そんな研介に、慈愛の籠った眼差しが注がれた。

「大丈夫。元氣すぎるだけだから……。はじめは誰でもそうよ……。肝心なのは焦らないこと。頭に血が上り過ぎないようにすることね。若さが暴走するようなら、溜めすぎないようにしておくとか……」

俯いていた研介は、横目でるり子の表情を盗み見ると、清楚な美貌にはどこかしら興奮の色が浮かんでいる気がした。

貞淑そうに澄ましながらも、未亡人の仮面の下には、奔放な素顔が潜んでいるのだ。

「興奮するのは仕方がないけれど、頭の隅の方でもいいから冷静な部分を保つようにするの……。例えば、数式を頭の中で解くとか……」

弄ぶようだった指先が、一本から二本に増え、ついには全ての指で肉幹を握りしめてくれる。

「あうっ！　ぐはあああ……。る、るり子さん……」

強まるばかりの刺激に、研介は他愛もなく喘ぎを漏らした。

「うふふ。これくらいで蕩けた顔をするのね。やっぱり、研介くん、可愛い！　もつと、いいことを教えてあげたくなっちゃう」

杏のような唇が、赤味を増した気がした。年下の男の子を弄ぶ刺激に、心を昂らせているのだろう。

「ぐあ、うおっ、あわあわわっ！」

しなやかな左手が肉ゾリに沿って上下しはじめる。右手は皺袋を包み込み、やさしく揉んでくれる。

「それにしても、すごいよね……。ゴツゴツしてて熱くて、ほとんど凶器みたい……」
実際、肉傘が破けそうなほどの膨張率に、亀頭部が艶光りするほどだ。

「いやだわ。興奮しちゃう！　こんなに凄いなんて！」

やわらかい掌に包まれ、やさしく握りしめられ、ゆっくりとスライドされて、研介

は凄まじい快楽に目を白黒させた。

「あううっ。おおっ、ぐふうううっ」

「ほら、快感にばかり捉われないように……。ああ、でも本当に研介くんのおちんちんすごい！ 大人の私でも、魅入られてしまいそうになるわ」

カチンコチンにいきり立つ肉塊は、恐るべき熱気を孕んでいる。美貌の未亡人に弄ばれ、切っ先からエラにかけてまで先走り汁でベトベトだった。

「に、匂いませんか？ 臭いでしょう？ 恥ずかしいなあ……」

不潔にしているつもりはないが、ふんと膣えた匂いが自らの鼻にまで届くのだ。

とりわけ美しい未亡人と醜い肉塊との取り合わせが、ミスマッチに思えてならない。「うううん。大丈夫。確かに酸っぱい匂いがするけれど、男の子の匂いらしくて、嫌いじゃないわ……」

「でも、シャワーも浴びていないから……」

「本当に大丈夫。むしろ興奮しているのよ。こんなにHなことするの久しぶりだもの……もう、五年以上していないから……」

るり子の言葉の節々には、亡き夫への想いがちりばめられている。にもかかわらず、こうして研介を勇気づけ、初体験の相手までしてくれようとしてくれている彼女のやさしさに、感動すら覚えた。

「ああん、おちんちん熱いわ……。私の手が焼きついてしまいそう。本当、罪作りなおちんちん……」

繊細な手指が、ゆつくりと一擦りふた擦り続ける。余った肉皮を利用したやさしい手淫に、ゾクゾクと性の漣が湧き起こる。

「研介くん、気持ちいい？ うふふ、私おかしいわね。冷静な部分を保っていてって言うっておきながら、やっぱり研介くんには、感じて欲しいの……。きっと、このいやらしいおちんちんが、未亡人の私を狂わせるのだわ……」

るり子の表情が、明らかに蕩けている。研介に半ばしなだれかかるように女体を密着させ、官能に美熟した39歳の肢体を牝の本能に盪惑させているのだ。

「ああ、どうしよう。若い男の子にこんな淫らないたずらを……。研介くんがあんまり可愛いから私も本気になってしまいそう……」

完熟の上に追熟さえ重ねた肉体は、おんな盛りに貪婪なまでに発情しているのだろう。洋服越しにも女体から、牡を虜にしてやまないエロフェロモンを濃密に放っているのが判る。

「恥ずかしいのは、研介くんばかりじゃないわ。イヤねえ、私、濡れている……。若い男の子にいけない悪戯をして、私、いやらしく濡らしているの……」

艶っぽい吐息を振りまいて手淫してくれているのは、本当にあの貞淑だった未亡人

なのだろうかと我が目を疑う。けれど、目前の美貌は、紛れもなくあのるり子なのだ。「ああ、もうだめだわ……。身体が熱く火照るの……」

肉茎に絡まっていた手指がふいに遠ざかると、美熟未亡人が手早く自らの白いシャツの前ボタンを外していった。

襟ぐりからオフホワイトのブラに包まれた、容のよい白いふくらみが覗ける。先日垣間見た時よりも、はつきりとフォルムが露わになり、ものすごくエロチックだ。

「ああっ、やっぱり、るり子さんのおっぱい、すごく、きれいなですね……」

研介に魅せるため脱いでくれたのだから、遠慮などいらぬ。正直な言葉を女体に浴びせるのも、そう理解したからだ。

「うふふ。ありがとう。若い女の子を見慣れている研介くんに、そう言ってもらえると、自信がつくわ」

口元のほくろが艶冶にほころんだ。

繊細な手指が暫し研介の勃起を離れ、るり子は身に着けているものを次々に脱いでいく。

白いシャツを脱ぎ、チノパンも脱ぎ捨てると、清楚なオフホワイトの下着にも躊躇なく手をかける。女神のような美貌を淫らに歪ませながら、純白の垂涎ボディが露わとなった。

「ああ、そんなに熱く見つめないで……。やっぱ若い男の子に見せるのは、恥ずかしいのよ……」

アラフォーとは思えないほど未亡人の女体は瑞々しく、想像以上にゴージャスだ。細身であるにもかかわらず、つくべき所に大胆に脂をのせ、肉感的極まりない。

圧倒的な乳房などは、スイカほどもありそう。あれほど大きいと思っていた香澄のバストを二回りは上回るだろう。

対する腰部は、相当に摂生していることをうかがわせるくびれ具合で、驚くほどにキュッと締まっていた。

「きれいだああ……。るり子さん超きれい……！」

感嘆の声と共に、本音で誉めそやす。

「いやあねえ。そんなに見ないで、本当に恥ずかしいの……。バストなんて大き過ぎで、醜いでしょう？ Fカップなんて、ブラジャーにも困るくらい……」

愚痴のように、何気にFカップと教えてくれるるり子は、やはり天然なのだろう。けれど、彼女が言うような醜さなど微塵も感じられない。

艶やかに純光る透明度の高い純白肌が、気品を感じさせるからだだろう。

「そんなことありません。醜いなんてそんな！ すつごく、きれいです……。でも、それ以上にエロイです……。乳首のせいかなあ？」

桜色の乳輪と同色の乳首は、丸い乳房と完璧にバランスが取れている。

黄金比率とでもいうのだろうか、神秘的と感じさせるほど完全無欠に感じられた。

「エロイって、言われるとやっぱ恥ずかしくなるわ……。でも、それはそそるってことかしら……」

頬を紅潮させた未亡人が、その羞恥を押し隠すように、そつと研介の胸板を押し、ベッドへと横たえさせてくれた。

6.

「初めてなのだから、私が上でいいわね？」

言いながら豊麗な女体が、研介の上に覆いかぶさる。

(ああ、るり子さんが、僕の上に跨ってくる……)

白く透き通るような乳房が、研介の上半身に擦りつけられる。

蕩ける感触に頬を強張らせながら、研介は未亡人の艶めく女体をもう一度その目で確かめる。

「もう。そんなにジロジロ見ないで……。私、そんなに若くないのよ。こんな歳では、形も何もかもが崩れていて恥ずかしいの……。香澄ちゃんの綺麗なカラダと比較されるのも辛いし……」

「そんなことありません。るり子さんは、本当に綺麗です。おっぱいだって、こんなに大きいのに垂れていないし、腰も括れていて……」

まさに官能美の極致とも言える女体を惜しげもなく誉めそやすと、それがうれいしとばかりにるり子が、研介に身を預けるように抱きついてくる。

「うれしいことばかり言ってくれる可愛い研介くんと、私の方がしたくなっちゃったわ。大丈夫よ。全て任せて……」

身じろぎする研介を、るり子がやさしく制した。

覆いかぶさっていた女体が、ゆっくりと持ち上げられる。

「ほら、ここよ。ここにおちんちんが挿入の……」

研介の腰の上、るり子が自らの下肢を折り畳んだまま、左右に大きく太ももをくつろげた。研介が初めてだからこそ、るり子は全てを晒してくれるのだ。

「こ、これがるり子さんのま○こ……」

露わな光景に、思わず息を呑む。

くつろげられたむっちりとした内ももの肌は、青白く抜けるような白さなのに、女陰周囲は楕円形のピンク色だ。

唇にも似た淫裂は、さらに赤みを増している。けれど、赤黒いというよりも濃いピンク色をしていて、決して穢れた色合いではない。アラフォーの未亡人であるはずな

のに、使い込まれた様子がなく、むしろ経験が浅いような綺麗な色彩だった。

細かい皺が走る女唇は、ぼつてりと膨らみ、二枚の女鶏冠が縦割れを繊細に飾っている。さらに、その下に少し黒ずんだ蟻の門渡りがピンと張り、赤みの強い菊座まで目に飛び込んでくる。

「ああ、恥ずかしいわ……」

自ら赦しているながら、あからさまに見られることを恥じらう未亡人。にもかかわらず、彼女の両手が自らの股間に伸びた。

両の中指を肉ピラの端にあてがい、左右にくつろげる。あえかに口を開いた縦割れが、鮮やかなピンク色の濡れ肉を覗かせた。

「ああ、な、なんていやらしい眺めなんだ……。でも、るり子さん、大丈夫なのか？ 俺のちんぼ、挿入るのでしようか？ なんだか、すごく狭い気が……」

いびつな膺口のなかには、桃色の柔褻が幾重にもひしめいて孔と呼べるほどの隙間がない。こんなでは、とても研介の剛直が収まると思えないのだ。

初心な疑問に、艶治に微笑んだ未亡人は、ベッドに後ろ手をつき屹立を捕まえた。

「今後のために、よく見ておいてね……」

いきり立つ肉塊の先端を花唇にあてがい、上下に滑らせてから壺口と嚙みあわせる。巾着状のいびつな環がひろがり、チュプツと鈴口を啜えこんだ。

「いいわね、研介くん。このまま挿入れるわよ？」

研介は顔を真っ赤にさせ、爆発寸前の自らの心臓音を聞いている。緊張で身じろぎ一つできずに、ポリウムたつぷりの尻がゆっくりと降りてくるのを見据えた。

くちゅんっ、と湿った音が響き、温かくやらかなものに亀頭部が呑み込まれる。

「ぐは……っ」

「す、すごい……。お、大きい……」

研介とるり子は、熱っぽい溜め息をシンクロさせた。

美熟女の艶腰がなおもずり下がると、予想以上に締め付けのキツイ粘膜がうねりながら研介のパンパンに膨張した器官を包み込み、内部へと迎えてくれる。一本一本の肉壁が独立して蠢き、亀頭から竿に至るまでを様々な角度からくすぐり、やさしく擦りつけてくる。

（ああっ、すごいっ！ るり子さんの膣内に、僕のちんぽが挿入っていくっ……）

ねっとりぬめる感触は、容易く研介を陶醉へと引きずり込んでいく。膣粘膜はとても温かく、まさに別世界だ。それはさながら母の抱擁を思わせる。呑みこまれていく部分から蕩けてしまいそうで、気持ちよくて仕方がない。

「ああっ、研介くん……研介くんのおちんちんが、挿入ってくるっ……」

るり子が漏らした泣きは、久々の結合におんなの悦びを滲ませたものだった。

「う、うぐうっ……」

研介は喉元を引き攣らせ、何度も呻きを漏らした。生まれて初めて体感する女体の内部に、わずかでも気を緩めると射精してしまいそうだ。

「もう少しよ……もつと奥まで挿れてあげるから……。まだ射精しちやダメよ……。あ、ああん……け、研介くうんっ……!」

るり子もまた、普段の楚々とした様子からは想像がつかないほど、全身から性熱を放射させている。落ち着いたアルトの声を淫らに掠れさせ、さらに細腰を落とすのだ。むっちりと張った尻が研介の下腹部に密着した瞬間、肉棒は付け根まで未亡人の胎内に呑みこまれていた。

「は、挿入っ……たわ!」

ついに美しい未亡人を相手に初体験したのだ。激しい感動に、研介は心も体も小刻みに震わせた。

「ああ、挿入ったのですね……。るり子さんとできたんだ! 僕のちんぼが、るり子さんのま〇こに全て突き刺さって……」

根元までずっぽり埋没した感覚に、美熟未亡人と繋がっている実感が湧いた。自分の分身をやさしく抱きしめてくれる柔孔。その感覚はるり子のイメージそのままだ。無数の褻が複雑に絡みつき、膣全体で初体験を祝福してくれている。

「うふふ。童貞卒業おめでどう」

「ありがとうございます。うれしいです。本当にるり子さんとHしてるのですね！
美しいるり子さんと……！」

「そうよ。研介くんは、私と結ばれたのよ。あん、でも、すごいっ。研介くんのおちんちん、逞しすぎて、こんなに潤っていても、少し突っ張る感じがするわ」

節くれ立った剛直が、小さいと思えていた蜜口にぶっさりと突き刺さっている。柔軟な淫裂に啜え込まれ、複雑な内部の襲々に肉幹をくすぐられている。

「うおっ……な、なにこれ、すごいです！ な、膣内が、ぐああああ……っ！」

研介の感動に呼応するかのように、膣肉のうねうねとした蠕動が強くなる。動かしでもないのに、ペニスに擦れるのだ。

快感に、研介が肉茎をひくつかせると、吐瀉に似た震えを浴びせられたるり子も、女の密室に快喜が込みあげるのか、悩ましい吐息を漏らした。

「あふん……あ、あはあ……。いいわ、硬くて、大きい気持ちいいっ……私、くふう
ううっつ、だ、ダメになりそう……」

「ぼ、僕もヤバイです。るり子さんのま〇こ、挿入れているだけで気持ちいいっ！」

押し寄せる悦楽に研介は、じっとしていられなくなり、軽い女体を腰の力だけで持ち上げるように下から突き上げた。

「あつ、だ、ダメよ……。あはあ、あつ、あつ、ああ……。ダメよ、ダメなの……。感じてしまおうっ」

豊麗な女体を下から串刺しにして、懸命に腰部をくねらせる。抜けだした茎胴が淫靡に煌めいては、再び花唇に潜り込んだ。

結合部に残ったぬめりが練りこまれ、又チャ又チャと妖しく囁る。

「セックスってこんななのですね。他人の身体のなかに、出たり入ったり……」

艶めかしい交合の眺めに固唾を飲んだのは、十代の少年だけではなかった。出産を経験したはずの未亡人も、あまりの生々しさに体温を上昇させている。

「ああん、こんなに激しいの、動物の交尾と変わらないわ……。この凄いおちんちんは、香澄ちゃんにはまだ早すぎるわ……」

もしかすると、るり子に研介を独占したい欲望が芽生えているのかもしれない。それが、おんなの業というものなのだろうか。

姪の彼氏と結ばれた罪の意識もあるはずだ。それでいて未亡人として自らを縛り付ける倫理観から、逸脱する解放感に身を浸しているのだろう。

だからこそ、あれほど慎ましかだつた未亡人が、こんなにも乱れるのだ。

後ろ手で支えた上体を反らし、たわわな胸のふくらみを高々と突きだし、艶やかな蜂腰を自らも揺すらせて、快感を貪るるり子。

「すごいわ。ねえ、研介くん、すごい……。教えているはずの私が、夢中になっている。いいの……ねえ、たまらないの……」

ままならない突き上げが、未亡人の力を借りてスムーズになると、蕩けるような快美が何十倍、何百倍にも膨れ上がった。

「ぐうううっ、あはああつ、ふ、ふうううっ！」

これぞ美熟女に翻弄されるしあわせ。るり子が腰を高々とあげれば、竿を覆う表皮が上方へ引つ張られ、雁首に熱く擦れる。

逆に先端部が、膣肉から外れそうな危うい位置から、未亡人が一気に蜂腰を落とせば、亀頭から付け根までをうねる膣内粘膜に擦られ、真空状態に近くなった子宮口に肉竿全体をバキュームされる。

「ああん、太くて硬いの……。研介くんの、奥まで届いてるう〜っ」

剛直が熱くぬかるんだ胎内を満たし、袋小路でトンと震動を響かせる。弓なりに反り上がった研介の尖端が、肉路の臍側にある子宮を持ち上げていた。

もちろん、初めての研介には、そのあたりの手応えは判っていない。けれど、こつんと切っ先がぶつかるたび、栗色の髪を左右に揺すらせ、苦悶にも似た表情で喘ぐるり子のよがり貌を目の当たりにできるのだ。

容のよい鼻は天を仰ぎ、紅潮させた頬が喜悦に強張っていた。

（ああ、すごい！ るり子さんが、僕のちんぽでどんどん乱れていく！）
男にとってこれほど嬉しい光景はない。文句のつけようもないほどの美女が、自らの分身に溺れ官能の表情を見せてくれるのだ。

扇情的な未亡人のおんな振りに、男の本能に火が着くのも当然だった。

「あううう、んはああおっ」

一際悩ましいよがり声をるり子があげた。跨る太ももに手指を食い込ませ、研介が大きく腰を突き上げたからだ。

「ひっ、ひっ、きゃああうん……」

甲高く未亡人が啼き乱れるのをいいことに、研介は二度三度と激しい腰使いをくれてやる。

貪婪に熟れた女体は、その肉感のわりに驚くほど軽い。研介の腰使いのたび、まるで神輿のように女体が上下乱舞した。

「ひああっ、お、おお……。だめ、激しい……っ！」

豊かなふくらみがぶるんぶるんと激しく上下するたび、るり子が首をのけ反らせ天井を仰ぐようにして、はしたない喘ぎを迸らせる。

「はううっ……お、おふうう……ダメ、ああ、ダメえっ！」

裂けんばかりに拡張された媚肉は、るり子がよがり啼くたびにヒクヒクと収縮し、

とめどなく甘い果汁を溢れさせている。

その締めつけの凄まじさには、思わず精を吸い取られそうなほど。かろうじてそれを堪えられているのは、香澄の時のような失態は二度とごめんだと思っているからだ。災い転じて福ではないが、あえなく一度放出していることも、研介にわずかな余裕を与えている。さらには、るり子に教えられた通り、頭の片隅では難しい数式の答えを何問も導き出していることもあった。

「あう……ひうっ、ひいっ……おお……」

るり子が絶頂間近にあることは、経験不足の研介の目にも明らかだ。

切羽詰まったその艶声は、悩ましさを増している。研介の突き上げに合わせ、貪るように自らも腰を蠢かせながら、身も世もなく啼くのだ。汗みどろの裸身をバラ色に染め、ムンムンとしたおんなの匂いも濃くなった。

「ひああっ、ああん、恥ずかしすぎるわ……研介くんの遅いおちんちんに我を忘れてしまうなんてっ！」

濃厚に牝性をさらけ出するり子の騎乗位は、まるでロデオのような激しさを見せた。研介もその腰つきに併せ、必死で腰を振りまくる。

「ああ、るり子さんのエロ貌、たまりません。感じ方も、セクシーすぎる！」

嗚咽さえ漏らしながら、鋭角的な顎のラインを際立たせてのけ反るるり子を、うっ



とりと見つめながら、研介は右手を伸ばし美麗な乳房を捕まえ、ゆさゆさ押し揉んだ。「ああ、やっぱり掌が蕩けてしまっそうなおっぱい！」

「あ、ああっ……おっぱいも感じる……」

欲情に乳房までが張り詰めていて、肉丘に指を深く食いこませると、すぐにプルッと弾き返してくるほどだ。

悩ましい感触に、研介はいつそう力を込めて揺さぶった。あるいは、しこった乳首を指の腹でつまんだり、転がしたりして、ピンク色が濃く色づき、ますます突起するのを眺めては愉しんだ。

「ああん、だめえ、イキそう……っ」

るり子は上気させた美貌を切なげに打ち振っている。喘ぐ朱唇から白い歯並びが零れ落ちた。

「本当に？ るり子さんがイッてしまうの？ イッてください！ るり子さんのイキ貌を僕に見せてっ！」

滑らかな太もも裏に鉤状にした掌をかませ、ぐいぐいと力づくで女体を揺さぶった。「あ、ああんっ！ だめえ、ぐりぐりしないでえ……い、ひっ！」

責めるたび、温かな潤み粘膜全体が肉竿にねっとり吸いつき、複雑な肉路がうねりながら甘く締めつけてくる。

淫らなまとわりつきに、研介の余命は一気に奪われた。

貪婪な大人のおんなの乱れ振りに、研介は感嘆と共に我慢の限界を感じた。

「ぐわああ、い、いいです……。るり子さんの超いやらしいイキま〇こ！」

二重瞼や目元をポウと妖しく染めて、るり子はドッと汗を噴いてのけ反った。さらにごとと突き上げると、未亡人の上体が研介の胸板にたおやかに崩れ落ちた。

「だってほんとうに、すごいおちんちん……。ああん、またイキそうっ……。」

汗にまみれた乳房が、研介の腹上で踊る。首筋にむしやぶりつくように両手を回し、キリキリと総身を絞るのだ。

甘い匂いが濃厚に押し寄せ、おんなに抱かれるしあわせを研介はたつぷりと味わう。肉感的な女体が、びくん、びくびくんと痙攣するたび、膣肉も勃起。ペニスを締め付けまくる。

「ふあああっ！ くふううっ……。ああ、どうしよう。恥ずかしいくらいイッてる。ねえ、研介くんも射精して……。私と一緒にいっ！」

赤く色づいた唇が、研介のそれに覆いかぶさる。熱い舌が口腔内で暴れ回った。

貪るような口づけに、若牡は頭に血を昇らせ、腰の跳ね上げを大きくさせた。快楽の入り口めがけ発火寸前の肉棒をズコズコと抜き挿しさせる。

艶尻だけを持ち上げた未亡人の媚肉をトロトロになるまで突きまくる。

「ぐふうっ……くうう、る、るり子さん……ぐおおおおつ！」

逞しい突きを送り込みながら、研介は獣めいた欲望剥き出しの唸り声を零した。限界ぎりぎりまで膨らみ上がった肉塊が爆発しそうだ。

「ああ、くるのね。研介くん。射精して、私もイクからっ！ おお、ほおおっっ。あつ、あつ、ああああああああああああっっ！」

るり子の官能の嗚咽が、激しく切羽詰まった調子となった。イキっぱなしの女体が、ガス欠の車のように痙攣を起こしている。

「射精します！ ぐああああああああああっっ、るり子さん！ ああ、るり子さん！ やるせない衝動に急ぎ立てられ、研介は最後の突き入れを送った。

本能の囁くまま、美熟未亡人の媚肉の最奥に切っ先を運び、戒めを解いた。磔のような一塊となった精液に、肉塊をぶると膣内で震わせる。

堪えに堪えていた射精感が、腰骨、背骨、脛骨を順に蕩かし、ついには脳髓まで震わせて突き抜ける。

「ぐふううううっ、おうっ、あうっ、あふうううっ……」

吐精の喜悦に情けない声が漏れる。初体験の充実が、あらためて胸に込み上げた。

（ああ、射精している！ るり子さんのなかに、未亡人の熟ま〇こで射精してる……！）
その事実を噛み締めるだけで、愉悦が百倍にも千倍にも膨らんでいく。射精痙攣に

肉塊が躍るたび、るり子も淫らにびくびくとイキ乱れていた。

「研介くん、射精しているのね……。私のなかがいっぱいになっている……。ああ、まだ射精するのね。いいわよ。全部、射精してね……」

精子全てを搾り取るうとでもするように、媚肉がやわらかく締めつけてくる。

甘く痺れきった肉塊は、凄まじい射精発作を繰り返し、ようやく全てを放出した。全身から急速に力が抜け、ドスンと腰部をベッドに落とした。

「ああっ、研介くん!! すぐく、よかったわっ! 私、こんなにイッたのはじめてかも……。うふふ、やっぱり罪作りなおちんちん。悪い人ね……」

しばらく気だるげに研介の腹上に、しなだれていた女体がゆっくり持ち上げられた。たつぷりと氣をやった美貌は、見紛うほど美しく紅潮している。

「本当ですか? 初めての僕でも、るり子さんに気持ちよくなってもらえました? だったら最高にしあわせです!」

心からの感謝と共に、研介は素直な想いを吐露した。

その気持ち伝わったのか、熟未亡人は急速に縮んでいく肉竿を、すぐにやさしく朱唇に啜えてくれた。

「ぐはあっ、る、るり子さん」

僅かに肉筒に残された精の残滓を美唇で処理してくれるのだ。

射精したばかりの分身はひどく敏感で、ぬるりとした唇粘膜がくすぐったく感じる。淫らに婀娜っぽい尻を左右に振りながら愛情たつぷりに始末してくれるるり子のその姿は、忘れ得ぬ初体験の記憶として、何度も研介の胸に反復されることだろう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリシノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキキアラノベル

ドキドキキアラノベルな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫